

京都市におけるキリスト教会の地域との関係に関する研究

龍谷大学 壽崎かすみ

アブストラクト

現在、日本の都市部では少子高齢化などを背景として、旧来の地域コミュニティが弱体化しており、新たなコミュニティの担い手を確保することがひとつの課題となっている。このため、新規に建設されたマンションへの転居などで新たに地域に流入した人をいかにして地域コミュニティに取り込むかについての取組がなされている。旧来の地域コミュニティは神社の祭りを共に担う氏子として組織化されているケースも少なくなかったが、近年は、氏子意識、氏子という概念そのものが特に新しく流入した人々に受け入れられにくい状況も生まれている。

その一方で、阪神・淡路大震災発生時には諸派合わせたキリスト教の教会が中核となり地域と接点をもち組織的に活動した例がみられた。また、東日本大震災の際にもキリスト教会が組織的に活動した。キリスト教会の得意とする部分を担ってもらうことで、キリスト教会にも地域の一翼を担ってもらうことの可能性も示されている。実際にキリスト教会の中には、在日外国人居住者の支援を担っているところもあり、これからグローバル化がすすみ、在日外国人の増加が見込まれる中で、地域コミュニティにおいて、キリスト教会に期待できる部分である。

キリスト教会が地域コミュニティの中で一定の役割を担うにあたり、問題となるのは、地域コミュニティに神社の祭礼の運営などの役割が強く残る場合、キリスト教と異なる宗教との間をどう調整するかである。キリスト教は一神教で、他の神を拝むこと、偶像を拝むことを禁止している。神社の祭礼などは相容れない。総務省は在日外国人の増加という現状を踏まえ、「多文化共生」を施策として打ち出した。外国人の文化、言葉、食事その他の習慣等と日本のそれとの違いを互いに認め合い、同じ地域で共に生活していこうという施策である。日本側の文化の中には初詣、お盆なども含まれるが、これは元来神道あるいは仏教の行事であり、宗教行事ともみなせる。多文化共生とは宗教行事、宗教についてもお互いを認め合い、同じ地域で共に生活していこうという施策であるはずである。

文化としての宗教については中村（中村, 2014）が「薄い宗教」と「濃い宗教」という言葉を用いて説明している。日本の伝統文化と称される初詣、お盆などは「薄い宗教」とみなせる。「濃い宗教」とは篤い信仰を持つ人にとっての宗教である。日本人の大多数は薄い宗教として神道、仏教の文化を身に着けている。

在日外国人が増加するという事は、この薄い宗教、濃い宗教の両者を含めた宗教について、地域コミュニティの中でマネージすることが必要になるということである。

本論文では、「宗教」という文化についての多文化共生について考える第一歩として、神社の祭り、地蔵盆などの宗教行事が残る地域が多く、またその行事を地域コミュニティの活性化に利用しようとしている京都市を対象とし、市内にあるキリスト教会の牧師・司祭にアンケートを行い、地域コミュニティで伝統として行われている宗教行事とどのように関わっているかを調査した。この結果を報告する。

（中村, 2014）中村圭志『教養としての宗教入門』中公新書 2014年

A study on the relation with local community to church in Kyoto-city

Kasumi Susaki Ryukoku University

Abstract

Recently in urbanized areas in Japan, traditional community become weak and it becomes issues to secure sufficient personnel to keep communities. Because of this situation, new residents who live in newly built apartment houses become targets as responsible community members and also become members of residents' association. There are many trial to make them joined residents' association. The number of traditional communities are also organized as communities of a Shinto shrine, but in recent years the consciousness of a member of community of Shinto shrine is become fading away and in some cases the concept of that has lost. It makes the situation more difficult.

On the other hand at the time of the earthquake disaster in Hanshin-Awaji, Churches supports disaster victims by organized way with community. And also that of Higashi-Nihon Churches had organized actions. These cases show that churches have the ability to take responsibilities in communities. In fact some Churches support foreign residents in Japan. From now on it is expected that globalization goes on and the number of foreigners living in Japan will increase. Probably it makes the role of Churches in community will increase.

However Churches have a part of responsibility in community, there is probability that they prevent to support the Japanese traditional events that are originally from Shinto shrine or Buddhism. Because Christianity has only one God and it prohibits to pray for anything except its only God. In case of that it is important to manage religious related things in community or residents' association. And it is one of the most important thing that Japanese society will become multicultural society. To be the symbiosis society with multi culture is now a policy of Japan.

In this paper Churches' attitude to Japanese traditional events that are originally from Shinto shrine or Buddhism have been investigated by a questionnaire to pastors or priests of churches inside Kyoto-city. Because Kyoto-city has many communities which have traditional events related to religion and local government of Kyoto-city try to use one of such kind of event called 'Zizo-bon' which is originally from a Buddhism event to pray children's health and grow up well.

京都市におけるキリスト教会の地域との関係に関する研究

龍谷大学 壽崎かすみ

1. はじめに

現在、日本の都市部では、少子高齢化などの理由で旧来の地域コミュニティが弱体化しており、新たなコミュニティの担い手を確保することがひとつの課題となっている。このため、新規に建設されたマンションへの転居などで新たに地域に流入した人を地域コミュニティに取り込むための方策が試みられている。

旧来の地域コミュニティは神社の祭りを共に担う氏子として組織化されているケースも少なくなかったが、近年は氏子意識、氏子という概念そのものが地域の人々に受け入れられにくい状況も生まれている（大谷、藤本、2012）。

その一方で、阪神・淡路大震災発生時には諸派合わせたキリスト教の教会が中核となり地域と接点をもち組織的に活動した例が見られた（永井他、2004）。東日本大震災の際にも、キリスト教の教会が組織的に活動した（徳田、2015）。

東京 23 区におけるキリスト教会の地域活動について（永井他、2004）の研究があり、キリスト教会の得意とする部分を担ってもらうことで、キリスト教会を地域コミュニティの新たな担い手に加えることの可能性を示している。

近年は、災害等の特別な場合だけでなく、平時にも外国人居住者の支援をキリスト教会、特にカトリック、聖公会の教会が担っているという研究がある（徳田、2012）（徳田、2014）（高橋、2014）。

在日外国人の増加という現状を踏まえて、総務省は「多文化共生」を施策として打ち出した。外国人の文化、言葉、食事その他の習慣等と日本のそれとの違いを互いに認め合い同じ地域で共に生活していこうという施策である。この「文化」に宗教も含まれることがわかる。日本の伝統文化といわれる初詣、七五三のお参り、お盆などは神道あるいは仏教を起源とする慣習であり伝統文化である。

宗教について中村は、（中村、2014）の中で「薄い

宗教」と「濃い宗教」という言葉を用いている。「薄い宗教」は、篤い信仰心はないが生まれ育った環境の中で身に着けた「宗教文化」のことを指しており、篤い信仰心のある宗教を「濃い宗教」としている。この言葉を用いると、日本人の大多数は、神道と仏教を薄い宗教とする。さらに神道や仏教を濃い宗教とする神官、僧侶と一部の信心深いといわれる信徒がいるということができる。

日本には欧米のような薄い宗教としてのキリスト教文化は希薄であるため、キリスト教は洗礼を受け毎週の礼拝をまもる、濃い宗教としてキリスト教に関わる人と、キリスト教の聖職者（両者を合わせて以下「キリスト教徒」と表記する）がいるが日本人の人口の 1%以下である。ミッションスクール等でキリスト教になじみ、薄い宗教としてのキリスト教に対する抵抗感のない人も一定数はいると考えられるが、日本人のキリスト教徒はマイノリティであり、キリスト教文化がマイナーであることに変わりはない。さらに、キリスト教は一神教であり、キリスト教以外の神を拝むこと、偶像を拝むことを禁じているという事実がある。

地域コミュニティにおいて、自治会、町内会などの地域コミュニティが神社の祭礼等を担うケースが東京圏などの都市部を離れると各地にみられるが、地域コミュニティが組織として神社の祭礼などを担う場合、その地域に住んでいるためにその組織に属し、神社の祭礼を担うというキリスト教徒にとっては異教の行事に関わるという精神的負担・参加を断った場合には摩擦がおきることなどが生じている可能性がある。多文化共生には、地域におけるこのような摩擦を回避することも目的として含まれると考える。

本論文では、濃い宗教、薄い宗教の両者を合わせた宗教に関わる多文化共生の現状をキリスト教徒の立場から調査する。調査対象地としては、薄い宗教に関わる伝統文化が残り、また市の方針としてこれを伝統的な無形文化財遺産とする動きがあり、地蔵盆と呼ばれ

る行事をその一環として選定し、地域コミュニティ活性化につなげようとする動きのある（前田, 2012）京都市を選定した。京都市内にある教会施設の牧師・司祭を対象とするアンケート調査の結果を実施した結果を報告する。この結果は、日本の伝統文化を薄く宗教としない在日外国人が増加するなかで、薄く宗教と関わる伝統文化を保存しつつ、地域における摩擦を回避する方策を検討する端緒となる。

2. 京都という地域

2. 1 京都の歴史

京都のまちとしての歴史は（正井, 2003）によれば、794年に桓武天皇が新しく建設した都に移動したことに始まる。新都は「平安京」と名付けられ、「千年の都」となった。平安京は、北は現在的一条通、南は九条通、東は寺町通、西は天神川のあたりを範囲とし、都を南北に走る中軸線の朱雀大路が現在の千本通に一致する。道路は碁盤目のように敷かれ、条坊制とよばれる町割りが行われた。現在の京都市街の道路が碁盤目状に走るのには、平安京造営時の街路計画に由来する。平安京造営時に朱雀大路を境界線に東側を左京、西側を右京とした。10世紀後半になると湿地が多く住居地に適していなかった右京はすたれ、左京に人が集まった。

織田信長のあと天下を統一した豊臣秀吉は京都の大改造に着手し、御土居をめぐらせ、その中を洛中と定め、都の範囲をはっきりさせた。また、洛中（平安京の内側）に散在していた寺院を鴨川の西側や船岡山の南の寺の内に移転させ、さらに町人地を設定した。現在の京都は平安京造営時の計画よりも、豊臣秀吉の大改造後の状況に由来するところが大きい。

明治維新以後、京都市は近隣の市・町などを合併しながら拡大し、2005年に京北町を合併して現在の市域となった。この間、市内の区の再編も行っているが、現在の上京区・中京区・下京区が明治維新当時と区域が若干異なるが、平安京以来の京都の伝統文化が強く残る地域である（以下この3区を「都心3区」と表記する）。

明治維新ののち、1869年に京都府は町組改正を実施し、京都の町中に室町期から成立していた共同体的

町組制度を、上京大組一番から三十三番組、下京大組一番から三十三番組に区分し、この番組ごとに小学校を創設した。これを番組小学校という。各番組はのちに、それぞれ論語などから名前をつけた。現在に至るまでの人口の変動等により小学校自体は新設、統廃合されているが、番組小学校時代の学区は「元学区」と呼ばれ、現在でも元学区のあるところでは、元学区が自治会の大きな単位で、そのもとで最少単位の「町内」が活動している。

このような地域でも、現在はマンション建設による新規住民が人口の過半数を超え地域コミュニティの新たな担い手として期待できる。しかしマンション住民には「元学区」は理解しがたいものであり、オートロックマンションの増加などもあって、新規住民を町内に加入させることは難しい。そこで建設時にマンション事業者との間で協定書や覚書を交わすことも多く、マンション入居者には町内に加入するかどうかの選択権がないケースもある。逆にマンションの規模が大きい場合は、町内側が「町内がのっとられるのではないか」といった危惧をもち、マンション住民に閉鎖的な場合もある。（鯨坂, 小松, 2008）

2. 2 祇園祭・平安講

（1）祇園祭

祇園祭は京都を代表する祭りのひとつで、（鯨坂, 小松, 2008）によれば八坂神社の神事と山鉾町（山や鉾を有するご町内）の行事が連動して7月1日から31日までの1か月間続く。神事としての祭りの中心は神輿渡御であり、山鉾町側の中心は山鉾の巡行である。山鉾の巡行は観光の目玉でもある。祇園祭の原形は898年にはじまり、応仁の乱後、1500年頃現在のような様式と組織が定着した。2015年も34基の山と鉾が巡行した。この山や鉾は現在の中京区・下京区にある鉾町と呼ばれる町内がもとになり設立した保存会により維持、管理されている。京都は両側町で、ひとつの町内の軒数は少ない。近年は分譲マンションに建て替えられるケースも増えており、以前はマンション住民抜きで行っていた祇園祭の準備等も、マンション住民にも関わってもらわざるを得ない状況が生まれているほか、山鉾の曳き手をはじめ多数のボランティアを募

っている。

また、八坂神社の氏子組織として「清々講社」が結成され、自治連合会の各種団体に組み込まれており、住民の祭事への参加、寄付を募っている。

(2) 平安講など

平安神宮は1895年に平安遷都1100年を記念して桓武天皇を祭った神社である。この平安神社を支えるために「平安講」と呼ばれる氏子組織が結成されている。これも自治連合会の各種団体に組み込まれており、住民の祭事への参加や寄付を募っている（鵜坂、小松、2008）。

京都市内には歴史ある神社等が各所にあり、地域の住民は氏子として寄付をし、祭りに参加するのが現在も習わしとなっているところが少なくない。

2.3 地蔵盆



地蔵盆は近畿地方で見られる伝統的行事であり、特に京都では読経、御詠歌、数珠回しといった子どもの安全の祈

図1 地蔵盆 僧侶の読経（桜井，2015）

願とともに、ゲームや福引なども行われている（鵜坂、小松、2008）。（前田他、2012）によれば、京都において地蔵盆は町内の人々により営まれてきた行事であり、1）地蔵菩薩のお祭り、2）子どもの安全祈願を中心とする。地蔵盆自体、歴史的・文化的価値を有する行事であるが、近年は地域、および行政からコミュニティ形成や地域運営の主体育成の手段としても期待され、様々な取り組みがされている。（竹内他、1999）によると都心3区には地蔵が249祭られており、平安末期に既存信仰と仏教と習合し地蔵信仰がうまれ共同

体の祈りの対象とされてきた。（前田他、2012）によると現在でも地蔵の管理は町内の役員、町内の住民の輪番で行われている。

地蔵盆は、形を変えて京都市内各所で行われている。地蔵がない地域でも地蔵盆のときだけお寺から地蔵（掛軸などの地蔵も地蔵盆には使われている）を借りてきて、地蔵盆をしている所もある一方で、読経などの宗教色をなくした「子ども祭り」として実施している地域もある。何もしていない所もある。

3. 京都とキリスト教

3.1 教会の設立時期

キリスト教年鑑2015（キリスト教年鑑編集委員会、2015）（以下「年鑑」と表記する）には京都市内の151のキリスト教施設が掲載されている。ここから「教区事務所」など6か所を除くと145の施設がありさらに、無教会派の集会1とキリスト教系私立

表1 設立年別教会数

年代	設立教会数
1876~1899	11
1900~1931	31
1932~1955	33
1955~1959	8
1960~1969	17
1970~1979	7
1980~1989	9
1990~2004	10
2005~	4

（年鑑より作成）

学校の礼拝堂1を除くと143の教会施設（以下「教会」と表記する）がある。

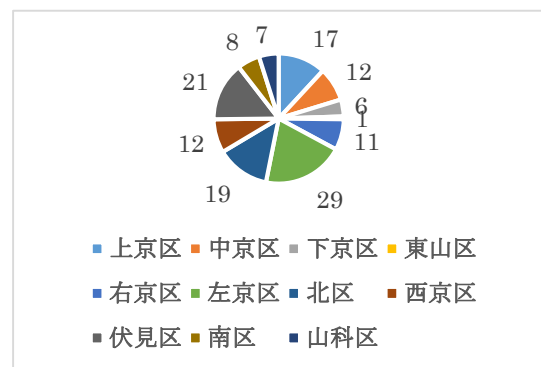


図2 行政区別 教会数（年鑑より作成）

年鑑に設立年の記載がない13の教会を除く130の教会の中で一番古いのは1876年設立の「同志社教会」と「平安教会」である。これを含めて1800年代に11の教会が設立されている。この後、第一次世界

大戦時の好景気で市周辺の人口が増加し、京都市域の拡大が1931年に行われ、教会は31増えて42となる。現在の教会の所在地は市域全域にわたる。

3. 2 宗派別教会数

表2 宗派別 教会数

宗派	教会数
ハリストス正教会	1
カトリック	15
聖公会	10
日本キリスト教団	26
その他	81

(年鑑より作成)

表3 教会規模別教会数

教会員数	教会数
201人以上	19
101~200	18
21から100	67
20人以下	26
不明	13

(年鑑より作成)

3. 3 京都とキリスト教

京都は明治初期からキリスト教の教会がつくられた地域であることが教会の設立時期から明らかになった。規模の大きい教会の存在も確認できた。

1平方キロメートルあたりの教会数と、教会1つあたりの人口を京都市の行政区別と、市内全域を対象にした結果を表4に示す。京都市域の教会が多いか少ないかについて考えるために、東京23区の(永井他、2004)で示されている数値と表4の数値を比較する。東京23区の平均値を見ると、1平方キロメートルあたりの教会数は1.12、1教会あたりの人口(千人)は11.7である。単位面積あたりの教会数については、京都市は山間部、農地を抱え、東京23区とは事情が異なるが、都心3区の平均は1.62である。1教会あたりの人口も市域全域で9.9であり23区と比較して大きな差があるとは言いがたい。行政区による教会数の違いは大きい(図3)。また、都心3区の教会の位

置を地図上にプロットすると中京区、下京区では、祇園祭の鉾町の外側に教会が立地していること、中京区、上京区で宗派の異なる教会が近接して立地しているところが複数ある。(表4は京都市WEBページに掲載の人口・面積を使用して作成)

表4 単位面積あたり教会数他

行政区	教会数 /1 km ²	人口/教会 (千人)
右京区	0.04	17.8
上京区	2.42	4.5
北区	0.21	5.9
左京区	0.12	5.4
下京区	0.88	12.7
中京区	1.62	8.7
西京区	0.20	12.7
東山区	0.13	37.2
伏見区	0.34	13.2
南区	0.51	12.3
山科区	0.24	18.8
全体	0.17	9.9

4. 寺社と関わる伝統文化とキリスト教

2章で京都には伝統文化として寺社と関わる行事が根強く残る地域があり、町内会、自治連合会としてそれを支えていることを述べた。3章で、京都にはキリスト教が早い時期からはいつてきており、教会数も少ないことを示した。

京都の薄い宗教に関わる伝統文化を町内会などが積極的に支えている地域にもキリスト教徒が住んでいる場合がある。町内会の活動に関わるなかで、薄い宗教に関わる伝統文化をキリスト教徒がどのように受け止めているかをアンケート調査の結果をもとに明らかにする。

アンケート調査は、3章で対象とした143のキリスト教会の牧師・司祭に郵送でアンケート票を送付し、郵送で回収した。無記名アンケートとして実施した。実施時期は2015年8月である。「あて所に尋ねあたりません」と返送されたアンケート票が5通あり、送付できたアンケート票の総数は138である。回収数は64通、回収率は46.3%である。一人の司祭あるいは牧師が2か所以上の教会施設をみている場合もあり、牧師・司祭へのアンケートと考えた場合の実際の回収率はこれ以上になると考えられる。アンケートの回収

率は教会の立地する区によりかなりの差がある。また所在地の記載なしが2あった(図3)。

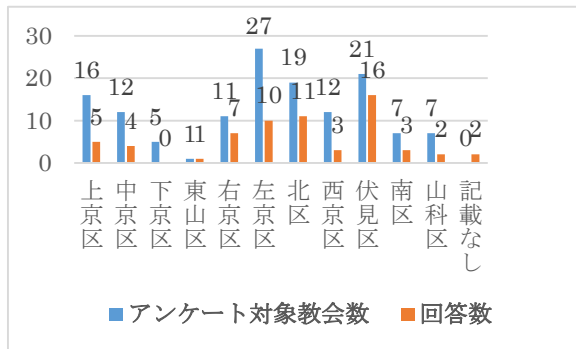


図3 行政区別 アンケート回収数

次に牧師・司祭の町内会・自治連合会等への加入率を図4に示す。プロテスタントの牧師は教会のそばあるいは教会の付帯施設として牧師の住居があるのが一般的である。カトリックの司教館は中京区にある。

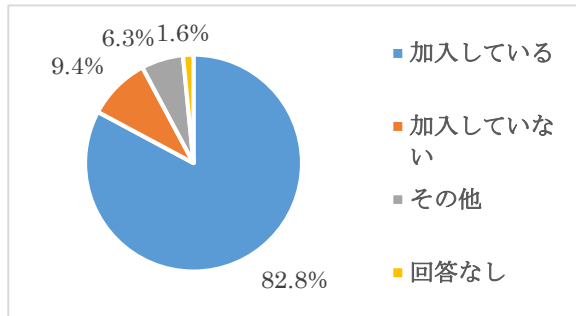


図4 牧師・司祭の町内会・自治連合会等加入率

加入している人が82.0%であり、20%弱の人が加入していない。自身の居住地の町内会・自治連合会などが地蔵盆・神社の祭礼の実施にどのようなかわり方をしているかを聞いた結果を図5に示す。

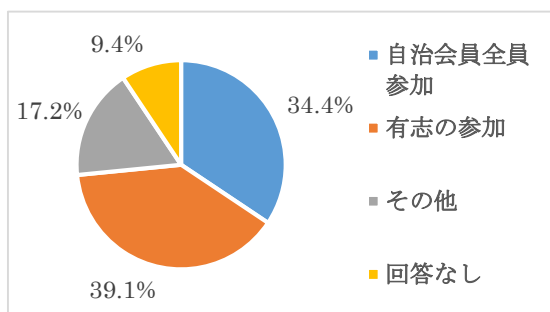


図5 町内会・自治連合会等の地藏盆・神社の祭礼へのかわり方

町内会全員と答えたところは36.2%であるが、有志であっても「役員になると関わることになる」、「実際は全員参加」などのコメントもあった。

町内会・自治連合会等に加入している牧師・司祭自

身の祭礼等への関わり方を図6に示す。

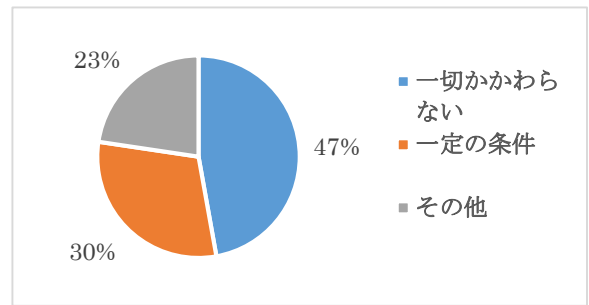


図6 牧師・司祭の神社の祭礼等への関わり方

町内会・自治連合会等の状況に拘わらず、「(神社の祭礼等には)一切かかわらない」が47.9%、「(神社の祭礼等に)一定の条件のもとに関わる」が30.0%である。「一定の条件」の内容として「町内会費に含まれる氏子料等のみ払う」というコメントが複数みられた。回答が「一切かかわらない」であっても町内会に加入している場合は「払っている」とみるのが妥当と考えられるため「一切関わらない」と「一定の条件のもとで」という回答の数字をそのまま扱うことはできない。町会費に含まれる氏子料等までは「意識していない」、あるいは「あきらめている」とも考えられる。

「一定の条件」の具体的内容として「地藏盆ではイベントの部分のみ関わる」「地藏盆自体が子どもイベントになっている」、「神社の祭礼には関わらない」などがある。「有志で運営」の地域で役員になり関わらざるを得ないときは「買物などを引き受ける」、「会計などを引き受け、夜の親睦会のみ出席する」など宗教行事の部分を受けつつ、他の仕事を引き受けることで町内会等に協力する姿勢を見せる努力をしている様子がみられた。また「自治連合会のなかの宗教色のない仕事を積極的に引き受け周囲の理解を得る」、「『日曜日の行事と神社、地藏盆関係には関わりません』と了承を得たうえで自治会長を引き受けた」、「自らが会長となり『地藏盆を子どもイベントに変えた』『神社への寄付は必須ではない』ことを自治会の配布文書に加えた」などのケースもある。その一方で、「ここに住んでいる限り、神社の祭礼等にも関わらないわけにいかない」「会費を払っているだけなので、町内会や自治連合会の活動の実態はわからない」という回答もある。

神社の祭礼等に関わらない理由について「周囲から聞かれたことはない」「説明もしない」を合わせると67.2%になるが、はじめに「クリスチャン（キリスト教徒）なので関わられません」と説明する、「自分が牧師・司祭として仕事をしているのを周囲の人が知っているので聞かれない」などの回答もある。「牧師・司祭ということで周囲が気をつかってくれる」という回答もある。「神社の祭礼などに関わらないことによる周囲との摩擦はない」と牧師・司祭側は認識している。地蔵盆や神社の祭礼への関わり方について教会員からの相談は「ない」が65.6%、「ある」が28.1%である。牧師・司祭が日頃からそういった行事への関わり方について話をしているという回答も複数あるが、各自に任せているケースが多い。

5. まとめ

5章に示した通り、牧師・司祭は町内会等に参加していても薄い宗教の伝統行事には、宗教色の強い部分を避けて関わる、あるいは伝統行事には一切関わらずスポーツ振興等々、自治連合会の他の仕事を積極的に引き受け、地域コミュニティに協力する姿勢を見せる努力をしていることがわかった。キリスト教徒の側も摩擦が起きないようにする努力をしている。今回の調査対象者は牧師・司祭であり、神官や僧侶と同じ立場の人たちである。一般の信徒の状況については別途調査が必要である。

キリスト教徒が特別な気遣いをせずに地域コミュニティの中で摩擦なく生活できることは、憲法で保障された信仰の自由の問題とも関わる。薄い宗教に関わる地域固有の伝統文化の維持と、個人の信仰の自由が両立できる地域コミュニティ・マネジメントの方法を探る必要がある。また、薄い宗教に関わる伝統文化をそのまま地域活性化の方策とすることは、その地域に新規に流入する住民を区別化する場合もあり得る。

参考文献

- (鯉坂, 小松, 2008) 鯉坂学、小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』世界思想社 2008年
(大谷, 藤本, 2012) 大谷栄一、藤本頼生編著『酷暑 宗教とソーシャル・キャピタル2 地域社会をつ

- くる宗教』明石書店 2012年
(キリスト教年鑑編集委員会, 2015) キリスト教年鑑編集委員会編『キリスト教年鑑2015』キリスト新聞社 2015年
(桜井, 2015) 桜井政成撮影 2015年8月
(高橋, 2014) 高橋典史代表 2014年度 第2回「現代社会における移民と宗教」研究会での聖公会、カトリック教会、創価学会からの報告より
(竹内, 布野, 1999) 竹内泰、布野修司「京都における地蔵の配置に関する考察」日本建築学会計画系論文集 第520号 pp263-270 1999年
(田中, 2010) 田中志敬「マンション増加地域におけるコミュニティ運営—京都市都心部の町内・元学区を事例として—」コミュニティ政策8 pp. 95-116 2010年
(徳田, 2012) 徳田剛「地域社会のグローバル化におけるカトリック教会の役割—愛媛県の教会における英語ミサの実践例から—」聖カタリナ大学キリスト教研究所紀要 第15巻 pp. 17-30 2012年
(徳田, 2014) 徳田剛「愛媛県のカトリック系移住者・滞在者の生活課題と信仰—英語ミサ参加者への質問紙調査の結果から—」聖カタリナ大学キリスト教研究所紀要 第17巻 35-52 2014年
(徳田, 2015) 徳田剛「被災外国人支援におけるカトリック教会の役割と意義—東日本大震災時の組織的対応とフィリピン系被災者への支援活動の事例より—」地域社会学会年報 第27集 115-126、2015年5月
(中村, 2014) 中村圭志『教養としての宗教入門』中公新書 2014年
(永井他, 2004) 永井恵一、十代田朗、津々見崇「東京23区におけるキリスト教会の立地と地域活動に関する研究」日本都市計画学会 都市計画論文集No. 39-3 pp. 427-432, 2014年
(前田他, 2012) 前田昌弘、森重幸子「地蔵盆の運営実態と地域のレジリエンス向上に果たす役割に関する研究」大学コンソーシアム京都 2012年度助成研究報告書
(正井, 2003) 正井康夫監修『歴史で読み解く図説京都の地理』青春出版社 2003年